

氏名	阿 拉 法 特 . 艾 尔 肯
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	医 学
学位授与番号	博甲第 4706 号
学位授与の日付	平成25年 3月25日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科病態制御科学専攻 (学位規則第4条第1項該当)

学位論文題目	The Maximum Standardized Uptake Value Is More Reliable Than Size Measurement in Early Follow-up to Evaluate Potential Pulmonary Malignancies Following Radiofrequency Ablation (SUVmaxは肺悪性腫瘍に対するラジオ波焼灼療法後の早期経過観察においてサイズ評価より信頼性が高い)
--------	---

論文審査委員	教授 岩月 啓氏 教授 木浦 勝行 准教授 大藤 剛宏
--------	-----------------------------

#### 学位論文内容の要旨

本研究では肺悪性腫瘍に対するラジオ波焼灼療法(RFA)後早期の経過観察におけるCTでのサイズ計測とPET/CTでのSUVmax測定の有用性に関して比較検討した。またRFA後3ヶ月と6ヶ月のいずれがSUVmax測定に適しているかについても検討した。対象はRFA前、3ヶ月後、6ヶ月後にPET/CTが施行されRFA2年後に無再発が確認された25症例30結節(非小細胞肺癌10結節、転移性肺腫瘍20結節)。RFA後6ヶ月以内ではSUVmaxが経時的に低下する傾向にあり、RFA6ヶ月後は3ヶ月後に比べてより炎症性変化の影響が少ないと考えられた。病変長径はRFA3ヶ月後にはRFA前より有意に増大していたが6ヶ月後の時点ではRFA前のサイズと同程度まで縮小していた。RFA後6ヶ月以内においては病変長径よりもSUVmaxがより信頼性が高く、SUVmax評価にはRFA3ヶ月後よりも6ヶ月後の方がより適していると考えられた。

#### 論文審査結果の要旨

本研究は、肺非小細胞肺癌および転移性肺癌に対するラジオ波焼灼療法後の評価をCTによる腫瘍径計測とPET/CTでのSUVmax測定のいずれの有用性が高いか、また、効果評価時期はいずれが適当かを検証したものである。対象は、ラジオ波焼灼療法を受けて2年後に無再発が確認された25症例の30結節病変(非小細胞肺癌10結節、転移性肺癌20結節)である。

ラジオ波治療後3カ月では、治療による炎症性変化を反映してCTによる腫瘍径は増大し、RECIST基準では増悪と判定される場合が多くみられた。一方、PET/CTのSUVmax値は、3か月後の増加はなかったが、6か月後には有意の減少が認められた。すなわち、ラジオ波焼灼治療後には炎症性修飾と思われる腫瘍径増大現象が見られるため、CT検査による腫瘍径計測の判定には注意が必要である。一方、PET/CTにおけるSUVmax値の計測ではそのような現象は少ないが、治療効果の適切な評価には治療後6カ月後の計測データがより適切であることを示した。ラジオ波焼灼治療の治療評価で留意すべき点を示した価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。